

# ブータンの国民総幸福（gross national happiness）と自文化観

Bhutan's "gross national happiness" and feelings about self-cultures

黒田清子<sup>1)</sup>

Kiyoko KURODA

## 1-1. はじめに

人間の幸せとは何か。これについては、個人、各社会さまざまなかたちで問われてきた。この夏、初めて「幸せの国」ブータンを訪れた。きっかけはここ数年ブータンへ行かされている先生から誘われたためである。同行したのは音楽教育学を専門とする先生たちである<sup>2)</sup>。そのため、今回の旅は、ブータンの音楽教育者・研究者との研究交流と観光が目的であった。よく知られているように、ブータンの旅行事情として、ガイドと運転手を伴わなければならない。また、滞在費も高額であり、単独旅行は認められていないため、容易に長期滞在はできない国である<sup>3)</sup>。今回の旅も現地滞在は、わずか6日間である。そのためこの研究報告は、ただの一旅行者の印象記にすぎないかもしれない。それでも、現在、急速に変わりゆくブータンの状況を書きとめておくこと、国民総幸福（gross national happiness, 以下GNH）というユニークな国家政策の柱のもと、そこでみられた自文化観<sup>4)</sup>について記述することは、冒頭の問いについて考察することにつながっていく。

## 1-2. ブータン概要と先行研究

ブータンは、ヒマラヤ山脈東部に位置し、インドと中国チベット自治区に囲まれた内陸国である。以前は専制君主制をとっていたが、2008年に議員選挙が行われ、世界で最も新しい立憲議会制民主主義という新体制がスタートした。

主な生業は、農業、牛やヤクの牧畜である。資源はないが、標高差を活かした水力発電によりインドへ電力を輸出しているほか、近年は観光が大きな産業となっている。

主要な国民は、チベット系ブータン人であり、チベット仏教、チベット語のゾンカが国教、国語として採用されている。学校教育では英語が使用され、若者は英語を話すことができる。

日本人にとってのブータンは、中尾佐助の『秘境ブータン』における「秘境」のイメージがあった。それはブータンが古くはチベットの支援を受けてきたが、1951年中国のチベット侵攻後、外交においてはインドとの関係を強めながらも、鎖国に近い状態が続いたためでもある。1961年、近代化政策に向かい、1972年に国際連合に加盟し、1974年に外国人観光客（団体のみ）の受け入れを開始した。

1983年2月に国際航空路が開設され、パロ国際空港とカルカッタとダッカの両路線で運航が始まった。1988年11月からは、ブータン国営ドルック航空の中型機が、ニューデリーとバンコクに乗り入れるようになり、アクセスのしやすさが格段にあがった。以前は年間の入国者数を制限してきた（最大5000人）が、それも1999年には廃止された。近年では、日本人観光客も増加し、「秘境」というイメージも徐々に薄らぎつつある。（本林2006:17-18）<sup>5)</sup>

ブータンと日本との関係はとても良好であり、最近では日本のテレビ番組にもよく取り上げられるようになった。2011年11月にジグミ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク（Jigme Khesar Namgyel Wangchuk）第五代国王夫妻が来日の折には連日ニュース番組に取り上げられて注目が高まった。

日本とブータンの正式な外交関係は1986年3月28日に始まる。両国ともに相手国に大使館は置かず駐印大使の兼轄である。日本には初代名誉領事に任命された大西一氏によって、1988年5月大阪にブータン王国名誉領事館が置かれた。同館は2000年3月15日をもって名誉総領事館に格上げになったが、従来通りビザ発給業務は行われていない<sup>6)</sup>。

ブータンが親日国である理由に、農業開発を行った西岡京治氏が度々取り上げられる。彼は現在でもブータンで一番有名な日本人だという。

日本人におけるブータン研究は、古くは照葉樹林文化論の中尾佐助、佐々木高明、国会図書館に貢献した今枝由郎のものがある。近年では、栗田康之、宮本万里などの研究があり、これらは貴重であるが、現代ブータンの体系的な研究はこれからといえる。

### 1-3. 国民総幸福について

国民総幸福（GNH）とは、国家の開発政策において、精神的な豊かさ（環境の保護や伝統文化の保持など）を最優先させようとする概念である。ブータンのジグミ・シンゲ・ワンチュク（Jigme Singye Wangchuck）第四代国王が提唱し、同国の開発政策における理論的支柱となった。

このGNHについては、近年日本人による研究も出はじめている<sup>7)</sup>。

次項からは、今回の旅で見聴きしたインタビュー、エピソード、物語、ジョーク等の「ことば」の数々を紹介しつつ、最後にブータンの国民総幸福と自文化観を考察する。

### 2-1. 政治、宗教、すべての中心：ゾン

第一日目、バンコク国際空港からインドを経由してパロ国際航空に入った。到着後すぐにパロ市内へ向かった。空がとても青く、気候も丁度よかった。パロ・ゾン（Paro Dzong）を見学した。

このパロ・ゾンは、2004年まで観光客は立ち入りが禁止されていた。ゾンへの道にはアーチ状に中央部が高くなった伝統的なつくりの橋が架かっていた。ここでは昔、罪人を川に流し、皆で石を投げる石打ちの死刑があったという。丘の上にそびえたつゾンへ登る途中、旗のある所で男性はカムニと呼ばれる白い布を巻く（女性は手織りのブラチュをつけて正装となる）。丘を回り込むとゾンの入り口となる。入ってすぐに四天王の壁画が描かれている。チベット系の寺院でよく目にするものである。突き当りの壁には日本でもよく知られている六道輪廻図が描かれている。中庭へ出ると、中央に仏教塔、左側が政治や法廷などの部屋がおかれた政治ゾーン、右側は僧侶たちの住居となっている宗教ゾーンがある。

政治部屋から出てきた男性は、青色のカムニ（一般人は白）、木製の剣（権威の象徴）とバッチをつけており議員だとわかる。彼は我々が日本人だとわかると、すぐに近寄り、先の東日本大震災についてお見舞いの言葉をいただいた。帰り道、ガイドが橋の上にいる子どもたちに声をかけていた。お寺をさぼったのかどうかを聞いたようであった。子どもたちは風邪薬の袋を見せて、自分たちがズル休みではないことを示していた。このように子どもたちに声をかけるのは普通のことだという。ガイドも昔、子どもを大人たちから声をかけられたという。

午後、パロからティンプーへ移動した。道路は舗装されており、空、山、段々畑の景色がずっと続いた。ティンプーに近づくと、道のところどころで牛が寝ていた。ブータンの自動車道路には電気式の信号はないが、牛が信号の役割をしているのだという。牛が寝ていることにより車はスピードを出しすぎない。出来たばかりの高速道路をめけると、首都ティンプーとなる。ティンプーに入ると一気に多くの建物が目につく。現在、建設ラッシュなのだという。3、4階建てのテナントビルやアパート群がひしめいている。現在ブータンでは、近代化の一側面として、ティンプーへの人口集中、都市化が懸念されている。一方、町の中心にある交差点では有名な手信号が見られた。ガイドによると、一度電気式の信号をつけようとしたが、住民たちから「ブータンらしくない」との声があがり手による信号に戻ったのだという。

## 2-2. 自文化と外来文化、2クラス・システムの音楽教育：AA-Yang音楽学校

AA-Yang Music Schoolは、できたばかりのブータン初のプライベート音楽学校であ

る。この学校ではブータン音楽、クラシック音楽両方のカリキュラムがあるが、我々が訪れた日はクラシック音楽の日であった。

キーボードのレッスンを見学すると、親指は1、人差し指2といったように鍵盤を弾く指番号を英語で指導していた。西洋音名のド、レ、ミも使用しているとのことであった。インド音名のサ、リ、ガ、マは古典すぎるので使用していない。生徒は3、4才の女の子で、彼女は、他の日にはインドの打楽器タブラのレッスンを受けているという。

隣の部屋ではヴァイオリンのレッスンが行われていた。指導には五線譜が使用されていた。ここでも英語で「Very Very OK, Keeping」などと教えていた。指導と一緒に演奏をするスタイルであった。厳しい指導はしないという。生徒の彼女は週2回、月曜日は西洋音楽、火曜日は仏教声明や楊琴演奏などを習っているという。彼女の姉は、ブータンの縦笛リンとキーボード（Pianoと呼ばれていた）を習っているという。生徒が希望する楽器を教えているようであった。学校全体の生徒数は25から30名ほどで、男女比は同じくらいだという。生徒の年齢は5歳から30歳と幅広い。ジャンルについてはフレキシブルに行うのだという。

奥には、机と椅子がいくつか置いてある音楽理論などをグループレッスンするための部屋があった。

別棟へ行くと、コンサート用の広い部屋があった。舞台にAa-Yang Music Schoolの幕が掛っており、ブータンの弦楽器ダムニャンがたくさん置かれていた。

奥から出てきたマネージャーに、我々の代表がブータンの音楽をどうしていきたいかを訪ねた。それに対してマネージャーは、「今までブータン音楽と他のものを混ぜてはいないので、これからは混ぜてつくるとい

だし、ブータンのダムニャンは忘れないようにしている。そうしないとすべて西洋音楽になってしまうから」という。ブータンの歌のジャンルであるジュンドラ (Zhungdra) やヴェードラ (Boedra) も残すのかという質問に対しては、昔のまま守るものと、新しい曲、その両方を残すのだという。ジュンドラはブータンで一番古い歌であり、古い言葉が多く、現代の人にはわからない言葉がある。それなので新しい曲は、人々がわかりやすい今の言葉でつくるのだという。ブータンでは学校で音楽教育を行っていない。この学校設立の目的は、ブータンの音楽、昔の古いものを守るためにつくった。ただ、伝統音楽だけだと生徒が来ないので、2クラス・システムをとっているのだという。ブータン音楽以外に西洋音楽やインド音楽などを教えているのは子どもに来てほしいからだという。

部屋の後ろの方には、つくりかけのダムニャンと箱が多数並べてあった。部屋の入り口には楊琴とその箱が多数積んであった。これらは、この学校にいる楽器職人の兄弟が、ブータンの高校のために楽器をつくっているのだという。今後、高校で音楽が教えられるように努力中であるという。これまで50台ほどを学校に寄贈した。この活動は教育省からの依頼なのだという。高校には、先生、生徒の中に楽器を弾ける人がいるので、その人が教えるのだという。

ブータン音楽を残したい学校側の考えと、新しい音楽も習いたい生徒側の気持ち、どちらの願いもかなえる2クラス・システムというフレキシブルなカリキュラム体制を興味深く感じた。また、学校での音楽教育が制度としてはまだないが、現在ある楽器から、現在弾ける人を「先生」として学校での音楽活動が行われつつある状況を知ることができた。

### 2-3. メモリアル・チョルテンの老人たち

ブータンでは、仏塔のことをチョルテン (Chorten) と呼んでいる。仏塔は本来、仏舎利を安置するための建物で、古代インドの塚状のストゥーパが原形であり、宇宙を構成する五要素 (地・水・火・風・空) を象徴している。

第二日目の朝、メモリアル・チョルテンを見学した<sup>8)</sup>。敷地内左手に人よりも大きなミニ車がいくつか並んでいる。敷地の中央に塔があり、人々がその塔を時計周りにまわっている。塔にむかって五体投地をしている人もいる。ティンプーの老人たちは、一日をここで過ごすのだという。祈りを捧げたり、ミニ車を回したり、日陰で休憩をし、雑談をしたりする。子どもや若者は学校や会社へ行く前に、朝、塔を3回回ってから登校、出勤するのだという。

祈ること、徳を積むことがブータンの人びとの日常生活に組み込まれている様子がうかがえた。それだけでなく、老人たちが一日を過ごす場所として、このチョルテンの存在を大きく感じた。

### 2-5. 一人で何役もこなす民族音楽学者：ケム・ソナム・ドルジ氏 (33歳)

Music of Bhutan Research Centerを訪問し、代表である民族音楽学者 (おそらくブータン唯一) ケム・ソナム・ドルジ (Kheng Sonam Dorji) 氏へその調査・研究活動に関するインタビューを行った。ここへの訪問の経緯は、我々の代表者がブータン音楽をまとめた *Masters of Bhutanese Traditional Music* という、ブータン伝統音楽の継承者へのインタビューがまとめられた一冊の本を手したことが契機となっている。

ドルジ氏は、ゲレフーというブータン東部の地域の出身である。そこには歌がなかった

ため、彼が初めてその地域の言葉で歌をつくったという。ゲレフーはインドのマナスと接する地域である。彼が中学生の頃、音楽の学校などはないので自然の音が作曲の先生であったという。彼は9年間、インドの大学で音楽教育を受けた。専攻はヴォーカル、副専攻はシタールだったという。2008年、ブータン政府から呼ばれ、スミソニアン研究所で催されたフォーク・フェスティバルへ行き、ブータン音楽についてレクチャーを行った。

政府から資金を得ているブータン王立舞踊団は、ブータン音楽の公演は行うが、調査・研究を行っていなかった。ドルジ氏は、インドでもっと勉強をしたかったが、ブータンの音楽研究を誰もやらないので、このリサーチセンターをつくったという。アメリカの民族音楽学者Janet HermanとJane Hancockに出会い、スポンサーになってもらい、ブータンの地方の音楽調査を開始した。現在、急速に失われつつある伝統的な歌や踊り、祭りなどを調査しているという。

調査の過程は、現地へ赴き歌や踊りを撮影し、歌い手や踊り手にインタビューをし、その記録をアーカイブスにし、報告書を書くというものである。インタビューは報告書や書籍にし、音楽はCDにし、映像はインタビューや生活風景などと共にドキュメンタリー映像という媒体に残している。2ヶ月前に行ったという、トンサ調査のドキュメンタリー映像を観せて頂いた。その作業の迅速さに驚かされると共に、彼の調査方法やその視点は、民族音楽学というよりも音楽人類学的なものであることが伺えた。彼は、基本的な音楽理論はインドでの音楽教育で、ブータン音楽についてはブータン音楽教育者ジグミ・ドゥッパ (Jigme Drukpa) 氏に教わったのだという。

彼の研究のもう一つの目的は、教育プログ

ラムをつくることである。調査研究の成果を学校教育に用いたいという。子どもたちにブータン音楽を教えるために、歌詞などはすべて文字にし、CDを作成している。

彼は公共の文化活動にも関わっている。ブータンでは歌や踊りのコンペティションがあるが、彼はそれらの企画や審査員をつとめている。また、ブータンの歌のジャンルはとても複雑であるが、それらの分類表を作成中であるという。

現在企画しているのは、2011年10月に27人のブータン音楽の演奏家を初めて集めるプロジェクトである。そのプロジェクトの後には、初の仏教音楽フェスティバルを企画している。このようなプロジェクト企図の背景として現在、ティンブーでは映画もインドのものに、ダンスもインド的になっていることを挙げた。彼はフェスティバルを催すことで、ブータン音楽を子どもたちに教示し、今の流行との違いを教えたいのだという。それを行わないと、急速にすべてがインド映画、インドダンスになってしまうことを彼は心配していた。現在のところ、学校教育にブータン音楽は取り入れられていないので、このようなフェスティバルの機会に、子どもたちに教え、そこから勉強して欲しいのだという。

例えばブータンの古い歌ジュンドラの歌詞は、高僧ほどよい歌詞となる。高僧は、歌詞だけでなく旋律もつくる。ドルジ氏は、それらの歌がなぜ、どのように、何年かけてつくられてきたのかを調べたいという。アーカイブスを製作しているのは保存が目的であるが、音楽は変化していく。その変化についても研究していきたいという。ジュンドラは、現代ブータン人にとって歌詞の内容が難しく、時々何をいっているのかわからない。子どもたちに、歌詞の意味を教えることができれば、勉強がしやすい。ジュンドラで一番大切なのは



歌詞の意味内容なのだという。現在、ブータンの音楽学校は、ヒマラヤ音楽スクールとAa-Yang音楽学校の二つしかない。

彼は、民族音楽学者として現在失われつつある地方の歌や踊りの調査をし、その調査から報告書、CD、映像アーカイブスを作成・製作するだけでなく、ブータンの歌や踊りのコンペティションの企画と審査員、ブータン音楽のフェスティバルを企画したり教材をつくり子どもたちに教えるといった音楽教育者としても活動している。まさに一人で何役もこなし、ブータン音楽を保存、普及、継承、発展させている人物であった。このような「一人」のパイオニア的存在がブータンという小さな国にとっては、とても大きいものとなることを感じられた。

## 2-6. 身近な存在である国王、大臣、僧侶

### 2-6-1. 国王が創設した技芸学院と教室に掲げられた「ことば」

二日目の午後、国立技芸学院(National institute for Zorig Chusum)を見学した。この職能訓練専門学校はワンチュク第五代国王が創設した学校で、道具や制服はすべて国立から寄贈されたという。木工彫刻の教室では、板に法輪を彫っていた。となりの上級クラスの部屋にはチャム(Cham)用の鹿マスクなどが飾られていた。教室には国王の写真が掲げられていた。

銅像の教室では、男女合体尊を製作中であった。ここでも壁に国王の写真が掲げられており、その横に「Gross National happiness is more important than Gross National Product」という国王の御言葉が書かれていた。

裁縫の教室でも、国王の写真が掲げられており、その横には刺繍で「If you're a good human being, then the skills and knowl-

edge you acquire will benefit the whole society. Otherwise, it's like giving a weapon to a child」という国王の御言葉がみられた。国王の写真はこの学院だけでなく、店、一般の家庭でもよく掲げられている。

### 2-6-2. 国王のオフィス、仏教の総本山であるタシチョ・ゾン

夕方、タシチョ・ゾン(Trashhi Chho Dzong)と官公庁を見学した<sup>9)</sup>。ここは国王のオフィスであり、仏教の総本山でもある。日中は議会などが行われ、夕方以降は僧侶たちの時間となるため、観光客は夕暮れの短い時間のみ見学できる。少し離れたところに国王の住居もみられた。入口で簡単なセキュリティチェックを受け中へ入るととても広い。ガイドによると国王は、このタシチョ・ゾンの外の庭を時々散歩されているという。ブータンでは国王がとても身近な存在であることを知った。

### 2-6-3. ド・チュラ峠での大臣との出会い

第三日目、ド・チュラ(Dochula)峠へ向かう。ティンブーを離れ山道に入ると、遠くにゾンが見え、ブータン軍の施設、水力発電施設などがみられた。この山道は、2か月前、国王が御付きと共に自転車で峠越えをしていたという。カーブカーブに小さな祠のようなものがあり、中には川の水力で回るマニ車が回っている。

ド・チュラ峠では、雪をかぶったヒマラヤ山脈が遠くに見えた。峠の端に、何も貼っていないElection Advertising Boardと書かれた掲示板があった。2008年の選挙の時、初めて使用されたという。ガイドの話によると、選挙の時には、皆2、3日かけて実家へ帰り選挙に備えたという。

峠近くのレストランに付くと、プージャ

(puja) をやっていた。この店のオーナーが、店が大きくなったことを感謝して、シャブドゥンを寄贈する。この儀礼の後、パロかティンプーでまた同じ儀礼をするのだという。店の壁には、建国の父ガワン・ナムゲル (シャブドゥン) が刺繍された大きな大仏画トンドルがかけられ、その前の祭壇には、クジャクの羽根、ガワン・ナムゲルの像、ボールに入った生米 (色がつけてある)、ワイングラス型のろうそく (karmikongbu)、線香 (thoki)、お菓子などが捧げられていた。

トンドルと向いあうように、僧侶たちが教を唱えていた。その横では、チャルメラ (ジャリン jaling) 2人、片面太鼓 (ンガ nga) を撥 (ンゲト nga-to) でたたく2人、台座にお教を唱える僧、その前には果物の供え物、でんでん太鼓 (drau) やシンバル (ralmo) を叩く人2人、長ラッパ (ドゥン dung) 2人、他にも数人の僧侶たちがいた。思いかけず、儀礼プージャを体験できた。

店のオーナーは有名な絵描きだという。Ministry of Home and Culture の大臣 Minjur Dorji 氏が参列していることを聞き、我々は急遽ガイドに挨拶のアポイントをとりつけてもらった。

食事を終えたばかりの大臣のもとへ訪問する。ブータンの文化について大臣から話を伺った。大臣は、ブータンも現在、日本のように伝統を失いつつあり、昨日我々が訪問したソナム・ドルジ氏のような人を援助しているという。今後、日本の大学から共同調査などを期待したいとのことであった。ブータンの文化に対する方針は、GNHの4つの柱の一つに伝統文化 (文化の推進) がおかれているので文化を守ることは大切なのだという。音楽については、これまで王立歌舞団は古典を守ってこなかったのが、今から始めようとしているところだという。昨日のソナム・ドルジ氏

の話と同様の話がうかがえた。まずはブータンの弦楽器ダムニャンから、毎年、高齢の名演奏家を集めて賞をだしているという。ソナム・ドルジ氏の調査では、演奏家に中には90歳の男性もいた、その方が亡くなれば、その音楽もすべてなくなってしまう。ソナム・ドルジ氏は今から探して、そこから文化をつくらうとしている。彼の活動がもう少し遅かったら、ブータン伝統文化は終わっていたと感じていると大臣はいう。文化に対する政府のサポートが一方的でもいけないし、アメリカの大学から一ヶ所だけでも問題があると大臣は語った。

大臣の話聞いた後外に出ると、付近の村の村長たちもプージャに参列していた。驚いたのは彼らのほとんど20代であったことである。このように社会の主要なポジションに、20代、30代が活躍しているという、日本とは異なる状況を知った。

再び車でワンデュ・ポダン (Wangdi Phodrang) へ移動する途中、ガイドととりとめのない話をした。山道を走るトラックには、車のライトの上に目のシールが貼られている。ガイドによると、あの目は魔よけであり、夜道ドライバーが寝てしまってもあの目が見ているから大丈夫なのだという。

山の上の寺が見えた、上にはパッコ村という第四代国王の妻の出身村がある。そのような説明を受けつつ山道をすすんでいると、第四代国王の一行に出会った。四駆車数台と救急車が一台、並んで停車していた。第四代国王は現在病気のため移動時にはいつも救急車を同行させているという。

ガイドは現第五代国王に会ったことがあるという。外国人旅行者を案内するガイドとドライバーはブータンにとって大切な存在だということで王宮に呼ばれた。その時、国王は

ガイドとドライバーの名前と顔をすべて覚えて、声をかけてくださったという。10月に結婚する王妃は、プムタンの出身である。プムタンは美人が多いことで有名な地であるという。そして王妃は、ガイドの友人のいとこののだという。小さな国とはいえ、王族や大臣と国民との関係性の身近さに驚かされた。

#### 2-6-4. 国王主導の移住計画

小さな集落をいくつか越え、発電所を建設するため多くのインド人出稼ぎ労働者が集まっていたロベサをぬけると、突然、まとまった数の住宅が現れた。山の上にあるワンデュ・ポダン付近の集落の人々を低地へ移住させる計画があるのだという。山の上では、地震や火事が発生すると危ないので、低地にマンションを建て、移住させる国王主導の計画だという。我々がここへ訪れた日が移住完了予定日だそうで、まさに今荷物をもって移動している人々がみられた。

ワンデュ・ポダン・ゾンを見学する。「統一宮殿」という意味だという。ゾンの付近には、サボテンがたくさんあり、赤、黄色の花を咲かせていた。ガイドによると、サボテンのトゲが兵隊を守っているのだという。ゾンは昔、城塞であり兵隊がいた。ゾン付近の町では人がすでに移動しており、建物には人がなかった。

大きなマニ車が二つワンデュ・ポダン入口に設けられていた。有名なツェチュ祭りが行われる広場がひろがる。3階建ての僧侶の住居を抜けると、お堂が現れる。仏像が3体、現在、過去、未来の像だという。描かれている像の冠の骸骨がユニークな目をしているので僧侶に訪ねたところ、神や先生が常に下界をみていることを表しているのだという。あとは密教なので、自分で解釈しなさい、と教えていただいた。

国王が移住計画を行うほど、火事が心配であるのか、いたるところに消火器やホースが整備されていた。その後も、火事でプータンのいろいろなものが失われてしまった話をいくつか聞いた。

移住先の新市街をぬけ、川沿いを走りプナカへ向かう。

#### 2-6-5. プナカ・ゾンの物語

プナカ・ゾン (Punakha Dzong) を見学する。このゾンは、父川ポチュと母川モチュの合流地点に建っている。ポチュ川にかかる橋を渡り、階段を上る。ゾンに入ると、広場に搭と菩提樹がそびえる。このゾンは昔、水害にあたり火事などで燃えたため歴史がわからなくなってしまったという。ガイドによれば、昔、高僧の骨をめぐりチベットと戦争になった、プータン側は骨を川に流したと言って戦争を終わらせたが、実はその骨はここに納められているのだという。

お堂の壁画にもそれぞれ物語があることを知る。プータン人にとって教養や知識とは、これらの物語を知っていることであり、同様に、仏教の教えを学ぶことを指しているのである。

#### 2-7. IよりWe, 金より知恵：音楽教育者ジグミ・ドゥッパ氏

四日目の朝、再びAa-Yang 音楽学校にて音楽教育者であり、縦笛リンの演奏家であるジグミ・ドゥッパ (Jigme Drukpa) 氏を訪ねた。

このインタビューで得られたプータン音楽の詳細については、他の報告に譲りたい。ここでは、ジグミ氏の言葉から得られた音楽教育、文化に対する考え方に着目して紹介する。

プータン音楽は、各地域でのやり方で教える。古い歌ジュンドラは西の地域のみであり、



東のネパール系の人々が多い地域ではネパール語の歌を教える。そのため先生はマルチでなければならないのだという。

Aa-Yang 音楽学校での 2 クラス・システムについてのお話では、教育の底流にある仏教真理を伺うことができた。

伝統文化を残すことについては、ブータンはラッキーであったといえる。現代と伝統の両方ができるからだ。エレキギターでロックをやりたい子どもは、ロックをやっても構わないが、そのルーツを探るように教える。大きな家で暮らしても、同時に小さな家でもいつでも暮らせる気持ちが大切なのだという。音楽は、楽しむことが大切であり、一方に伝統、もう一方に現代というのがこの学校のポリシーなのだという。ブータン政府も同じように、ゾンカ語と英語の 2 言語という言語政策を行っている。自文化 (伝統) を知るべきなのは、他文化 (現代) のためであるという。

同行した先生が「伝統とは何か」について質問をした。この難しい質問にジグミ氏は具体的に答えた。「ブータン伝統音楽の歌詞の本はあるが、旋律は各先生の心 (頭) の中にある状態にある。UNは何もしなかったため、ブータンは伝統音楽の多くを失ってしまった。現在は、流入するインド文化に抵抗することで独自文化を保っているといえる。ブータンにとって大切なのは自らの精神的幸福である。だからアメリカのように心理カウンセラーはこの国ではいらぬ。一番重要なのは、平和な心をもって暮らすこと、戦わないことなのだ。これは楽器のハーモニーと同じである。都会の暮らしには少ししか意味がない、田舎の暮らしには皆が知っているものが多くある。都会ではビルの高さを競っている、経済も同様に競っている。ブータンには、金はないが、知恵がある。」こういった心を重視することが、まさにブータンの「伝統」であることを

知った。

ジグミ氏は、現在、音楽教育の政策を作成しているところである。そこでは歌の90%はブータンの民俗音楽をとり入れている。仏教真理には、I (私) より We (私たち) という無私の考えかたがある。ブータンの昔の歌をみしてみると、仏教の歌の中に「私は」という歌はない、これはブータンにとって自然なことなのだという。ブータンの歌を残すことが、そのような考え方を残すことにつながってほしいというジグミ氏の気持ちが伝わってきた。

彼は、ノルウェーの音楽大学で声楽を習ったとき、そのやりかた、文化の違いにショックを受けたという。それまでずっと自由に歌ってきたのに、そこでは何かが違っていた。楽譜が読めるとヴィジュアルサウンドが消えてしまうことに気付いたのだという。現在彼は、3S (Simple, Smile, Slow) を大切にしている。

「昔、子供は外で遊んだ、今は家でテレビを見ている。IT世代を懸念している。現在世界で多くの人がITを使用している。このようなデジタルデバイスはブータンにとって危険だとみている。テレビや携帯電話が普及したこれからが問題になってくる。そのことを心配している。政府は、観光客数年間1万2000人を予定しており、ティンパーも建設ラッシュをむかえ大きなビルが建ち、多くの車が走るようになった。しかし、サイズでなくクオリティを大切にしなければならない。」

ジグミ氏の話からは、急速に変化するブータンに対しての懸念が感じられた。実際、ブータンではパソコンがそれほど普及していない中、若者がスマートフォンを操作するのを見て驚いた。しかし同時にジグミ氏からは、精神的幸福の大切さ、金より知恵、IよりWeといったブータン人の本質は若い世代も変わらないでいてほしいといった教育者としての願いが感じ取られた。

## 2-8. 国技アーチェリーと歌・踊りのつながり：第三代国王の音楽家アプ・デンゴ氏と息子ツェワン氏

### 2-8-1. 第三代国王の音楽家アプ・デンゴ氏

ティンブーからパロへ移動する。パロ郊外ランゴにて、アプ・デンゴ (Ap Dengo) 氏とその息子ツェワン (Tshewang) 氏、彼らが率いる音楽舞踊団「プンツォ・ダヤン (Phuntsho Drayang)」のパフォーマンスを見学した。

父デンゴ氏は第三代国王の時の音楽家であった。デンゴ氏の父は第三代国王のヴィ (ボディガード) であった。ヴィの息子はヴィにならなければいけない。デンゴ氏は、現五代目国王のおじのヴィになった。第三代国王は、子供の時から楽器やアーチェリーが好きであり、第三代国王に呼ばれるとデンゴ氏は歌を歌い王の前で踊った。また、氏はアーチェリーの名手でもある。昔、兵のグループで競争したとき、竹の弓で1日33回的にあてた記録を持っている。この記録は、伝説となっている。第三代国王とよく一緒にアーチェリーをしたという。現在あるブータン内のアーチェリー・トーナメントは、デンゴ氏がはじめてつくったルールなのだという。ブータンの国技であり、男性のたしなみとされている弓技 (ダツェ) であるが、近年は、竹の弓から洋弓を使用するように変わってきた。

デンゴ氏に歌や踊りの先生はいない。村での祭りや、家でのお祈り、親戚の集まりの際に踊りをやりながら覚えてきた。若者が住みこみで歌や踊りを覚える音楽舞踊団「プンツォ・ダヤン」のようなグループは、パロではここだけである。2003年9月1日に始めたという。庭にてプンツォ・ダヤンの歌や合奏、踊りを見学した。

### 2-8-2. 弦楽器ダムニャンにまつわる天女伝説

プンツォ・ダヤンの公演の後、デンゴ氏はダムニャンにまつわる物語を教えてくださいました。ダムニャンの弦には男性女性の性差があるという。ポケ (男) とモケ (女)、それらがいつも一緒になることを演奏で表現している。楊琴の場合にもこの性差はあり、オクターヴ音の上がモケ、下がポケなのだという。

ダムニャン本体に描かれた神様タムカムチェンマは、知識の神様、音楽の神様でもある。天女は7人姉妹であり、ダムニャンの7弦はこれを表している。次のようなダムニャンにまつわる天女物語がある。天女7人姉妹が、ある時温泉に入っていた。牛飼い男が、天女一人と話した罪により、弦も一つだけ半分の長さになったのだという。「牛飼いは貧乏であった。天女が温泉に入っている間置いてあったダムニャンを牛飼いはもっていこうとした。6人姉妹は天界へ飛んで行ってしまった。牛飼いは残った天女と仲良くなった。天女は『ダムニャンはあなたにあげるが大事にしてください、また私に会いたくなったら、弾いてください、すぐに来ます』といった。牛飼いは、貧乏から金持ちになり、近くの村の人が嫉妬した。なぜ金持ちになれたのかを牛飼いに聞いた。牛飼いは天女から口外しないようにいわれていた天女のダムニャン話をしてしまう。話を聞いた村人がダムニャンを弾くと、飛んできた天女は牛飼いと違う人が居たのでショックで気を失ってしまった。」こうして、人間と恋をした天女への罰として、一番下の弦が半分の長さになり、音はオクターヴ上になったのだという。

もう一つ、ダムニャンが竜頭である理由の物語がある。「昔、ダムニャンの名手がいた。彼は人びとだけでなく妖怪にも好かれ、病気になる頭がおかしくなり、石を投げるように

なってしまった。僧侶たちは心配し、いろいろと調べたところ『竜頭は魔よけになる』ことを知り、ダムニャンを竜頭にした。すると彼は元気になり、悪い妖怪が来なくなった。」デング氏のダムニャンは竜頭の横に布の飾りがついている、この布は天女の耳飾りなのだという。

他にも、仮面舞踊チャムをつくったペマ・リンパの物語など、ブータンの歌や踊りには、すべて意味(物語)があるのだという。僧侶はこれらについてよく知っており、全部の意味がわかる。一般人は全部の意味は知らない。親から聞いたことだけに限られてしまう。それでも多くの物語をブータン人が共有していることがうかがえた。

### 2-8-3. 夕食時にGNHの話題：ツェワン氏宅

デング氏の息子ツェワン氏は国立教育大学で音楽指導を担当している。音楽以外にもリグ・ラム・ナムジャ<sup>10)</sup>も教えている。これは、ブータンの道徳であり、民族衣装の着方、目上の者への礼儀作法などを指している。これもGNHの4柱の一つとして大変重要視されている。GNHは心が一番大切としている。ツェワン氏によると、「最近の若者のゴの丈の長さは大臣レベルになっている、本来は膝をみせなければならない。袖の長さも長すぎる」のだと言う。日本人の我々ではわからないところでも、ブータン伝統文化が変化しつつあることをうかがえた。

昔、テレビなどのメディアはなかったが、父デング氏はブータンじゅうが知る有名人だったという。つい1カ月前、弓の試合にデング氏が出場したとき、多くのブータン人が観に来た。20、30年前からデング氏のことを知っていた人が集まった。アプ・デングという名前は、ブータンでは2人だけなのだという。

ツェワン氏は父デング氏を大変尊敬しており、「自分の父のようになりたい」と言っていた。

夕食の途中、GNHが話題となった。ただ国が示したGNHの方針を確認しあうようなものではなく、「GNHとはこういうものだと自分は考える」というように皆が、気軽に議論、討論していた。GNHは国の政策の柱だが、同時に自分たちのものでもあるということがうかがえた。また議論をとおしてよい方向へ変化していく、実行中のものとして語り合われていた。これまでにみられたように、政策だけでなく王族や大臣といった国家の重要人物と一般国民との距離感・関係性の身近さを感じられた。このような「身近さ」が小国としてまとまる鍵となっているのではないかと感じた。

### 2-9. 篤い信仰心：タクツェン寺院とキチュ・ラカン

第五日目は山肌に建つタクツェン寺院を見学した。

昔、タクツェン<sup>11)</sup> (Taksang 虎のねぐら) は火事の被害をうけた(1998年)。そのとき、パロでは一家に一人が寺院復興に奉仕することが義務付けられたという。我々のガイドは当時16歳だった。3か月間山の上で働き、屋根をつくったという。そのときの現場監督はとてこわい人であった。山の上で寝て、朝はやく起こされ、警察に名前呼ばれ、作業にはいる生活をおくった。

火事するとき、当時の国王が火の中から仏像を救った話がある。火事の原因はバターナンであったかわからないが、現在、バターナンは寺院とは別の場所に供えるようになっている。バターナンを備える場所を訪れると、昔ガイドを監督したという人がバターナンを管理していた。

タクツェン寺院はいくつかの寺があるが、

観光客が入れるのは一部だけである。

ガイドは、ブータンに来ることは旅行ではなく巡礼だととらえているという。日本人や観光客は、タクツェンに来て寺のある山上までなかなか登らない。そのことをとても残念に思うと述べた。ガイドは日本に行ったことがあるが、自分は日本に巡礼に行ったと思って旅行したという。仏陀について知ることとはとても楽しいことなのだという。寺院・宗教観の日本との違いに驚かされた。

国内最古の寺院キチュ・ラカン (Kichu Lakang) を見学した。一年に二度実がなる夏冬みかんの木が植えられている。この木は他の地では実がならず、この寺にもってきたところ実がなったという。

堂内に、東郷文彦 (元カルカッタ総領事) の像があった。昭和天皇の葬式の時、来日した前ブータン国王がお忍びで訪問した人物である。

前国王の母もよく参拝に来るといふ。1968年、第3代王妃ケサン・ワンチュクにより建立された新堂にパドマサンババが安置された。

境内では祭りの準備をしていた。とても古く、聖なる寺という印象をうけた。本堂の床には歪な形に凹んだ箇所があり、五体投地をし続けた足裏の跡が残っていた。ブータン人の信仰心の篤さを目で見て知ることができた。

## 2-10. 国技アーチェリーと、なんでもかなくてくれる国王

国技であるアーチェリーは土日に練習や試合を行う。トーナメントは村対村、会社対会社、学校対学校など様々な規模のものがあるという。賞品は車など豪華なものが用意される。

第六日目の朝、はやめに出発したが残念な

がらアーチェリーは行われていなかった。ところが空港に到着すると、他地域で行われているトーナメントがテレビ中継されていた。

国技であるアーチェリーは、大変人気がある。140m先の的に竹製の弓矢もしくは洋弓で矢を射る。的に当たると男たちは「ウォー」と手をあげ、どっしりとしたステップを踏みながら喜びのダンスを踊る。的に外した場合は、的に側面にいた仲間たちが「もう少し上だ」とか「右だ」といったメッセージをジェスチャーで射手に伝える。外した本人は静かに立ち去る。少し離れた場所では、少女たちが輪踊りをしながら相手をひやかす歌を歌いプレッシャーをかけている。このように矢を射ることと歌い踊ることが交互にくり返され、なだらかに時間が過ぎていく。

男たちは毎週末練習をしているという。地区ごとの大会もあり、優勝すると四輪駆動車など豪華な賞品をもらえるため皆真剣である。試合はテレビ中継されており、皆真剣に観ている。アーチェリー以外にもブータンには様々なコンペティションがある。歌やダンスの場合は、ステージで披露したり、テレビで流れる映像から聴衆が優れていると思う人やチームを判断し携帯電話から投票するのだという。パロで宿泊したホテルには、地下にディスコがあった。ディスコは一度禁止されたが、若者たちの強い要望もあり、夜10-12時の間だけ営業しているという。11時45分には警察が来て、家に帰るようながすのだという。

他の娯楽施設、バスケットコート、サッカーコートは国王がつくってくれたという。パロのある村の子供がバスケットボールをやりがった、それを知った国王はバスケットコートをつくったという。空港内のバスケットコート、サッカー場、アーチェリー場も国王がつくらせた。このようにブータンの人々がアーチェリー・トーナメントや歌や踊りのコンペ



ティション, 新たなスポーツに熱中していることがうかがえた。また, 国民の要望をかなえてくれる存在として, 国王のことが語られていた。

### 3-1. ブータンのGNHと自文化観の考察

ここまで旅程に沿ってブータンで見聞きしたことを述べてきた。ここからは, 国策GNHとからめて考察してみたい。

GNHとは何か。具体的な内容としては1998年, テインレイ氏によりうたい上げられた四本柱と2006年, ブータン総研が折りこんだ9つの指標がとりあげられる。

しかし特徴的なことは, このGNH概念と国民との距離感である。中心となる政策, GNHが常に人々によって議論されていたことから, トップダウンで施行される政策ではないように思われた。酒宴の席で, 「GNHとはこういうものだ」, 「GNHとはこうあるべきだ」と, 確認もしくは議論が繰り返されて, GNH概念自体が国民により補強されているのではないかと予見できる。

### 3-2. 近代化, グローバル化にたいする懸念

「幸せの国」の理想モデルとされているブータンだが, 問題がないわけでもない。

一つは, インド化の諸相である。ソナム・ドルジ氏が懸念していたように, 急速にインド映画やインドダンスといったインド文化の流入が挙げられる。実際パロで行ったディスコの音楽はインドのクラブ音楽であった。映画や音楽などの流行もインドのものがみられた。

もう一つは, ITの導入である。パソコンよりすばやく携帯電話が広く普及し, 若者はスマートフォンを使って音楽を聴いたり, 情報を調べたり, インターネットにアクセスす

ようになっていく。ブータンの若者は英語が堪能であり, そのことで逆に外国文化に急速にとりかこまれてしまう。

ブータンでみられた, 電気式から戻した手信号, 時間を限定したディスコなどにみられた政策の選択方向のユニークさは, 国民の「心」を大切にした結果である。これらは試行錯誤を伴うが, 国民相互の距離の近さ, 手作り感があり, 自覚のある自文化観がもてる要素だといえる。これに対し, グローバル化, つまり人, モノ, 情報があふれる社会はジグミ氏が述べたように「心」が二次社会といえる。

ここで使用している自文化観という言葉は, ブータン人にとってのブータン文化とは何か, といった考え方, 見方のことである。ただし, 冒頭に述べたように私はブータンの一部分を短期間, 垣間見ただけであるため, 今回の報告はブータンすべてにあてはまらないかもしれない。

もう一つ, ジグミ氏の言葉もあったように, 大きな家に暮らすことよりも, 小さな家の生活にいつでもかえることができることが重要であり, ブータンにはそういった心が一番大切だということである。

これまで述べてきたブータンの人々に共有されたエピソード群, 王族や仏僧についての物語, 天女伝説, サボテンのトゲが兵士を守るといったジョークにいたるまで, これらの言葉群は, 想像力の豊かさを共有しており, そのことがまた「心」を一番に大切にすることそのものだといえる。さらに, そのことが王や大臣といった為政者と国民の距離の近さ, 国家政策を議論, 参加貢献したりできるブータン人としての自覚につながっているのではないか。

現在, ブータン人のその「心」の変化が懸念されている。



### 3-3. おわりに

人間の幸せとは何か。それはインタビューなどでできかたのように、「心」が豊かであることに他ならない。何かをたくさん「持っている」という量の多さではない。学力、体力、忍耐力、財力といった力の「強さ」でもない。何か「ある／ない」ではない。「心」が豊かであるとは、これまでみてきたブータンの文脈で言えば、想像力豊かな「ことば」群の共有度の高さにあるのではないかといえる。GNHという国家政策の柱だけでなく、物語、仏陀や国王に関するエピソード、ブータン式のジョークにいたるまでの「ことば」群である。これらを共有できる心の純度というふうにと考えると、何かを「持っている」「力が強い」ではなく、心の「動き方」や、心のニュートラルな「位置」が問題となっていることがわかる。

以上が、ブータン第一印象から読み取れたブータンのGNHとそれにもとづく自文化観の考察である。このような結び方は、学問的合理性に欠け、研究報告にふさわしくないかもしれない。実際、風の谷パロの風景やブータンの人々の「心」にふれていると、ノスタルジック、ロマンチックな気持ちになってしまう。それでも、今回読みとれたことを記述しておくことは、冒頭の問いを考察することにつながると考える。ブータンの「幸せ論」の考察をよりすすめるためには、チベット仏教の考え方についても研究が必要であるし、何よりブータン人が言う「心」とは何かについても考察が必要であろう。幸福論、幸因論といったことにまで展開させるには、さらに研究が必要であることはいままでもない。

#### 【注】

- 1) 金城学院大学非常勤講師。
- 2) 今回の同行者は、新潟大学の伊野義博先生を

リーダーに、東京学芸大学の加藤富美子先生、武蔵野音楽大学の山本幸弘先生、広島大学の権藤敦子先生である。

- 3) ブータンへの観光は、現地旅行会社に対して、3人以上のグループ旅行であれば、一日一人当たり200 U S \$ の公定料金を支払う。この料金には宿泊、食事、車、運転手、専門ガイドの費用がパッケージ化されている。
- 4) ここでいう自文化観とは、ブータン人にとってのブータン文化のイメージである。
- 5) ブータンの歴史は、即、仏教の歴史といえる。六世紀頃、シャーマニズムの一種のボン教がこの地方に導入された。現在でも、ボン教を起源とした祭礼が行われているという。八世紀になるとグル・パドマサンバヴァによって、仏教がブータンに伝えられた。しかし、グル・パドマサンバヴァが伝えたニマ派は、その後、チベットから迫害され逃げてきた数々の宗派と数世紀にわたって対立し、激しい闘争を行うようになった。こうして、ドゥルック派やラ派、バラワ派、チャカサン派、ニニン派などが形成されるようになった。十二世紀になると、ドゥルック派によってブータン統一の兆しが見られたが、ラ派との対立は五〇〇年間続き、ブータンの歴史に大きな影響を与えたという。一方、十七世紀初頭、チベットではダライ・ラマを首長とする黄帽ゲルク派が勢力を拡大し、ラサ付近のドゥルック派の中心地であるラルン僧院まで勢力を伸ばしてきた。その結果、ドゥルック派のラマ僧が各地に亡命する事態となった。

そのなかで、1616年にブータンに移住してきたガワン・ナムゲル(1594-1652)は、ドゥルック派の有力者の家系から援助を受け、西ブータンの主な谷にゾンを建設した。1639年、ガワン・ナムゲルは南下侵入してきたチベット人と戦って勝利を収め、宗教界・世俗界の双方の最高位を示すシャブドゥンという称号を得て、王国の西部を統一した。また、シャブドゥンの称号に加えて、ラマ教の最高位の称号であるリンポチェにもなり、これによって二重神権政治が確立した。

1651年、ガワン・ナムゲルは逝去するまでに西ブータンの全土を統一し、その後、数年内に東ブータンもその支配下となった。そして、ドゥルック派が聖界のみならず俗界の中心になった。

しかし、ガワン・ナムゲルの死は五八年間にわたって秘密とされた。この間に世俗権力を把握していたドゥルック・デシの力が強くなり、シャブドゥンの死が公になってから内戦が次々に勃発した。そこでシャブドゥンの化身としてトゥートゥルク (二代目=シャブドゥン) が選ばれたが、二代目シャブドゥンは幼かったこともあって、ドゥルック・デシや官僚の専横が目立つようになった。また、地方を治めるフィラ (=ペンロップ) も絶え間ない中央の権力争いに乗じて自治権の拡大をはかり、再び群雄割拠の時代に戻ってしまった。この状態が二十世紀初頭まで二世紀以上にわたって継続された。

そのなかで、1907年、トンサ地方のペンロップ (領主) であったウゲン・ワンチュックはブータン全土を再統一し、宗教界・世俗界の双方から推戴されてブータン王国の世襲君主となり、ドゥルック・キャルポ (龍の国の尊い支配者) の称号を得た。初代と二代目の国王は、国の統一に全力を挙げ、三代目の国王は、鎖国状態のなかで、政治や社会機構を改革し、近代化させようとする新しい試みを行った。例えば、国会議員の三分の二を公選制にしたほか、農地配分、農奴廃止、自動車道路網建設、万国郵便連合加盟、国際連合加盟などがあげられる。しかし、1972年に四十四歳で逝去し、第四代国王は十六歳で王位を継承した。(本林2006: 64-67)

6) 1974年以前に入国した日本人について山本の報告がある。

1913年、多田等観が仏教研究の目的でパナカを通り、三五日ほどかけてチベットのラサへ入ったとされている。

1974年、西川一三氏、ハマで

1958年、中尾佐助大阪府立大学助教授 (当時) が正式な招待を受けた最初の日本人として入国。約四カ月にわたった旅は1959年に『秘境ブータン』として発表された。

1962年、東郷文彦カルカッタ総領事 (当時) が、いせ夫人とともに、日本の外交官として初めて入国。この旅は1965年に『ヒマラヤの王国ブータン』として発表された。

1963年、松平インド大使 (当時) 夫妻、北村アメリカ局長 (当時)、東郷文彦氏随員。向後元彦氏ブンツォリンまで随員。

1963年、大槻廣氏を団長とする日本プラント

協会電力パルプ資源調査団入国。

1963年、小松製作所社員2名、ブルドーザー修理のため入国。

1966年、西岡京治氏がブータンの要請により、コロombo計画の農業専門化として日本政府から派遣される。赴任から28年後の1992年3月26日、12時間に及ぶ氏の国葬が行われた。後に、氏を偲ぶチョルテンがブータンの人々によって建てられた。

1967年、原寛東京大学教授 (当時) を隊長とする植物調査隊が入国。

1967年、京都大学山岳部、小野寺幸之進氏、上田豊氏入国。

1967年、NHK海外取材班、森田昌明氏、浅井健祐氏入国。

1967年、毎日テレビ入国。

1967年、高田仁覺師入国。

1968年、小方全弘氏入国。

1968年、小野寺幸之進氏隊長 (京都大学)、上田豊隊員、市川光雄入国。

1969年、桑原武夫総裁、松尾稔隊長の学術調査 (京都大学) ほか隊員6名入国。

1970年、栗田靖之氏夫妻入国。

1970年、藤井知昭氏がインド軍に同行する形で入国。

1970年、光島督氏、ブンツォリンに1泊。

1971年、西山孝氏夫妻入国。

1971年、宇山インド大使 (当時) 夫妻他2名入国。

1971年、神原公使 (当時) 一行入国。

1972年、小方全弘氏が津村重舎氏と4回目の入国。(山本2001: 102-103)

7) GNHの概要とブータンの政治体制について大橋がまとめている。GNHの提唱者は、ジグメ・シンゲ・ワンチュク第四代国王である。彼は1972年十六歳で即位し、十七歳の戴冠式のころ「ブータンはGNPよりGNHで行くべきだ」と発想し、その考え方を76年12月、スリランカのコロomboで開かれた第五回非同盟諸国会議後の記者会見で発表した。第四代国王は、即位後、全国の村々を歩いて国民とふれあい、ますますGNHの大切さを確信していった。北に中国、南にインドという大国・強国に囲まれたブータンは、半世紀前までは鎖国同然であった。しかし、GNHをかかげ国民の平安を維持していく中で、

そのユニークな文化と価値観が国連が経済協力開発機構（OECD）、国連開発計画（UNDP）、世界銀行など、国際機関の目を引きつけていった。第四代国王の学友で腹心の部下であり、現在同国の首相をつとめるジグメ・イエゼル・ティンレイ氏は、98年、韓国・ソウルで開催されたアジア太平洋ミレニアム会議に招かれて、「GNHの価値観と開発」と題する基調講演をした。そこでうたい上げられたのがGNHの四本柱、つまり、①経済的自立、②環境保護、③文化の推進、④良き統治であった。

ブータンはここ数年、GNH国際会議を国内外で開いている。本国ブータンで第一回目、カナダで第二回目、タイで第三回目、再びブータンで第四回目を開催し、09年11月の第五回目は、南米ブラジルで開かれた。

GNHをより具体的なものにするために、06年にはブータン総研（CBS）が九つの指標を折り込んだ。すなわち①精神面の幸福、②人々の健康、③教育、④文化の多様性、⑤地域の活力、⑥環境の多様性と活力、⑦時間の使い方とバランス、⑧生活水準・所得、⑨良き統治である。この指標にもとづいて、ブータン総研は、〇六年に三五〇サンプル、〇八年に九五〇サンプルで国民の訪問調査をし、ダショー・カルマ・ウラ所長と八人に研究者が分担して調査をまとめ、第四回GNH国際会議でも発表していた。

GNHは「憲法」にも国是としてうたわれている。そしてブータンの十の省（保険省、教育省、農業省、内務文化省、外務省、情報通信省、財務省、労働人材省、労働居住省、経済省）の日々の活動の中で実践される。これらの省の上にGNHコミッション（GNH委員会）が置かれ、責任者は首相のジグメ・イエゼル・ティンレイ氏となっている。（大橋2010：13-16）

また、大橋は変わりゆくブータンの政治体制に対する国民の反応について報告している。

08年3月の国民議会の選挙結果は、ブータン調和党の地滑りの勝利となり、党首ティンレイ氏が首相となり、世界で最も新しい立憲議会制民主主義国の誕生となった。1616年にブータンという国が統一され、政府ができ法律ができて以来、仏教と王政は車の両輪（デュアル・システム）となってブータンの人々の心や行動の中に深く浸透してきたが、それからおよそ四百年

後に議会が発足し、新しい憲法が承認され、政教分離の、立憲議会制民主主義という全く新しい体制がスタートしたのである。ブータンの中高年知識層の中には、この先行きを非常に心配している人が少なくなかった。しかし若者は「ブータンの民主主義には仏教の教えが入っていて、世界的にもユニークなものとなる」と明るく自身に満ちていた。（大橋2010：46）

さらに大橋は、九十七%の国民が「幸福」と答えている理由についても報告している。「それは、第一にブータンの文化的側面からきています。村に住む人たちは、西洋的論理で幸福といっているのではなく、自分のコンテクスト（文脈）で答えている。そのコンテクストには、ブータンの仏教文化が強く反映されているのです。物質文化ブームがまだ普及していないので、いまの状態で心の満足をえていると考えています。第二の理由は、他の人と比べたり、昔と比べて、教育や医療が無料になっていることで幸福と感じているということです。第三に、ブータンは、助け合いによる社会のセーフティネットが強い。つながりを形成していくいわゆる社会資本が広く行きわたっていることです。仏教の強い影響で、お金もうけの競争主義を好まない。人々がお金を欲しくないと思っているわけでは必ずしもないのですが、金銭や物欲に走ることをいましめる仏教の抑制が利いているのです。シンプルな人生を大切にしており、これは仏教でコントロールされているのです。」（大橋2010：52-53）

このようにブータン人の「幸福」感は仏教と強く関係していることがわかる。

山本は、経済発展、グローバル化の結果いきづまりを見せる現代社会においてブータンを研究する意義を講演している。

第五代国王は、ティンレイ首相の第四回GNH国際会議の基調講演によれば、戴冠式で次のようなことを語られたという。「変化の激しい世界ですが、平和と安全、そして幸福がなければ、何もないことと同じです。この平和・安全・幸福こそがGNHの真髄です。私はすべてのものを国民に与えますが、私は何もとりません。小さなヒマラヤの国の王ではありますが、世界中の人々のより大きな福祉と幸福を可能したいと考えます。」

現代認識の一つに先進国と発展途上国という対置がある。それは前近代と近代化という視点に立つものであって、そこでは人類社会の発展段階論が前提的に措定されており、近代化に大きな価値が与えられ、前近代段階にとどまっている社会を差別し軽視する観点が存在している。

1960年代までは、西欧をモデルとした近代化が普遍的価値として受けとめられ、人類社会の到達すべき理想としてその実現に向かって努力をすることが強く求められてきた。だが、「合理的な経済機構、政治形態としての民主主義、社会形態としての都市的生活様式、文化形態としてのマス・コミュニケーション、人間類型としての自律的・自覚的個人などが、そのおかれた体制的文脈をはなれて自立化し普遍化する」といわれてきた諸状況は、資本主義の高度発展のなかで矛盾を露呈し腐朽の一途を辿ることになった。

人間の私的化・孤独化・物象化が顕著となってきた。

さらに、資本主義の世界再編成の周辺部におかれた発展途上国においては、先進諸国の資本主義的近代化の矛盾がしわ寄せされ、また大量の資源収奪の故に、容易に途上国レベルから浮上できないでいる。

われわれは、これまでの西欧的近代化と訣別することを求めねばならないのではないだろうか。

われわれはブータンを研究することによって、資本主義的近代化とは異なった近代化—自然と人間が共存し人間的な生活を実現しうる近代化—の可能性をさぐることができるかもしれない。(山本1993: 111-113)

- 8) メモリアル・チョルテンは1974年に第三代国王を偲んで建てられた。第三代国王の追悼供養塔といわれているが、単に国王が逝去したことを偲び供養する目的で建立されたものではない。ブータンの仏教では、仏を表現することが功德を積むことになり、そのためには「身・口・意」の三業が必要とされている。第三代国王も「身・口・意」をかなえる三事業を計画し、「身」として一万体の仏像、「口」として紺紙金泥の『大蔵経』を完成させたが、「意」を意味するチョルテンの完成を待たずして急逝してしまった。そこで、国王の遺志を継いで、国家事業として

チョルテンの建立を完成されたので、第三代国王の追悼の意味も込めてメモリアル・チョルテンと呼ばれるようになったという。(本林2006: 41-42)

- 9) ブータンの政治と宗教の中心であるタシチョ・ゾン(「栄光ある宗教の砦」の意味)は、南北約二四〇メートル、東西約一〇メートルの総大な建物である。

ゾンとは、行政・司法官庁と寺院が同居した城郭様式の建物であり、その制度は、一七世紀のガワン・ナムゲルが導入したものである。ブータンの主要な谷には必ずゾンがあり、昔は戦略上重要な役割を担っていた。ゾンの建築様式は、基本的に回廊式の建物が四辺形の外壁を構成し、そのなかに一つ、あるいは、幾つかの中庭が設けられている。ゾンの中央には、城でいえば本丸、寺院でいえば金堂にあたるウツェと呼ばれる数階建ての塔がそびえ、これを境にして、行政ゾーンと宗教ゾーンに分けられている。ゾンの建築には、本来は設計図を用いず、釘を一本も使わない。

タシチョ・ゾンの歴史は、十三世紀のカギュ派のなかの小セクト、ドゥルック派を初めてブータンに伝えた、ブータン人の信仰の父といわれるラマ・パジョ・ドゥッゴシ・シンボがこの土地にドラゴン僧院(青い石の僧院)を建てたことに始まるという。その後、1641年にドゥルック派のもとに国を統一したガワン・ナムゲルが大きな要塞を建て、現在の名前をつけたという。同時にプナカを冬の都、ティンブーを夏の都とし、両方の土地に巨大なゾンを築き、公式的には、プナカを都として、政教一致の政府が始まった。1955年に第三代国王ジグメ・ドルジ・ワンチュックがティンブーを恒久首都に定め、老朽化したタシチョ・ゾンを再建し、中央政府、中央僧院、国会議事堂を整備した。このゾンでは、午前八時から午後五時までの政府官庁の勤務時間の間は、外国人の立ち入りは一切禁止となる。その後、日没までは外国人観光客も自由に出入りが許されるが、日没の鐘が鳴ると、一般のブータン人も入城することができない。夜間はおよそ一〇〇〇名いる僧侶のための宗教空間となる。(本林2006: 35-36)

- 10) Driglam Namzhangと呼ばれる礼儀作法は、社会人としての基本マナーである。「Drig」は



調和を「Lam」は振る舞い方、「Nam」は秩序や制度、「Zhang」は保持を意味する。プータン総合研究所所長のカルマ・ウラ（Karma Ura）によれば、ディグラムナムジャは「教養ある人間がとるべき振る舞いの規則や規律のこと」である。

由来は、一七世紀にプータンを統一したシャブドゥン、ンガワン・ナムゲルがもたらした言葉にあると言われている。それは、「仏の道に至るための規範」と言うべきものであった。1985年7月に、細部を決める委員会が国王の命によって収集されて、現在の形になっている。現在では、ツァ・ワ・スン（Tsa wa sun：三つの基礎〔国家、人民、社会を三位一体として考える〕）と共に、このディグラムナムジャは国家のアイデンティティを形成するものとして、非常に重要視されている。

国王と話すときは、最大限の注意を要する。まず、「こちらから話しかけない、質問しないこと」が基本である。さらに、「国王に息がかからないように左手で口を隠すようにする」「目を合わせない」など細かいしきたりがある。

プータンにおけるあいさつの意味を考察してみると、プータン人は仏像の前には五体投地をする。これは丁寧なあいさつをしているとも言えるが、その理由として考えられるのは、この仏像たちのなかにはブッダや不動明王に混ざって、「師（グル）」があるからである。現世で徳を積んだ高僧を神と共に崇め奉る習慣が、現在のプータンの礼儀作法に生かされている。つまり、「偉い人」に対して礼をつくすのは、「師」に対して礼をつくすこととつながると分析できるのである。このような意味からも、礼儀作法を「偉い人」につくすことは自ら仏教徒としての徳を積む行為につながるのである。その基準で、いまの礼儀作法は決められている。（平山2005：249-253）

大橋は、次のような言説を紹介している。

「プータンの組織で推進されているのはドウリクナムナンザ（正しい表記はディグラム・ナムジャ）という精神。これは調和のある生活を意識的に送るという精神。家族の崩壊、核家族化という社会的な傾向や、片親家庭、社会の端に高齢者を追いやる状況に対抗して、私たちはその伝統、習慣を維持し、育てようとしていま

す。それによって家族をつなぎとめ、コミュニティが力を持ち、繁栄できるようにしています。私たちは大家族のネットワークを大事にします。これは社会をもっとも持続可能にしていけるための〈セーフティネット〉である。豊かな国であってもその福祉制度では提供できない感情的、経済的、社会的なニーズを満たすものです。というのは、家族というのは自然にできたものであり、それに対して国家が行っている仕組みは人為的なもので、内面的に持続不可能だからです。幸福は人間関係にあります。大事にしている人に喜びを与え、思いやりを持ち、色々なものを分かち合い、自らの欲を制御するということです。幸福は人間関係が拡大するときに感じるもの。人間関係が上手くいかないときは、悲しみや寂しさを感じます。」（大橋2010：28-29）

「これは、行動や姿勢、どう社会に対応するか、〈心〉〈身体〉〈言葉〉の教育のセットです。そう考え方を正し、どう知識や価値観を吸収し、どう尊敬するか。正しいこと、信頼できること、心がやさしいことへ、自分のたたずまいを調和させること。職場、学校といったコミュニティやグループや家族で関係を良くするためのキーワードです。身体と個々との両方を使って、社会環境を良くしていくことです。仏教の教えそのものではありませんが、仏教の価値観は心のもち方や身体の使い方のベースにあると思いますね。悟りにゆきつく前に、悲しみを抑制し、欲望をのりこえるといったことが大切です。ところで私は、日本文化にも日本バージョンのディグラム・ナムジャがあると思う。オン（恩）とか恩を返す、デューティ（義理）といった言葉があるではないですか。」

「プータン人にとってはエチケットであるディグラム・ナムジャは、我々の人生の一部であり、我々の文化の一部であり、人生の自然な実践、人生の基準であり、若い世代に引きついでもらわなければならないのです。行動と結果なのです。」（大橋2010：37-38）

11) 聖地タクツァン僧院は、断崖の岩肌にはめこまれるように建っており、下は900メートルある絶壁となっている。プータンの人々は一生に一度はこの僧院を訪れることを願っているという。

伝説によれば、747年にグル・パドマサンバ



ヴァ (グル・リンポチェともいわれる) が八変化相の一つであるドルジェ・ドロという忿怒尊の姿をして、天駆ける虎に乗ってこの地に飛んできたという。タクツェンとは「虎の巣」という意味であり、僧院の中の洞のなかには虎に乗ったグル像がある。グル・パドマサンバヴァ (「蓮華から生まれた師」の意味) はインドの高僧でチベット系仏教ニンマ (旧) 派の開祖である。八世紀にブータンを訪れたグルは、タントラ (密教) 化した高度な仏教を導入した。グルが足を運んだ所、瞑想した場所はすべて聖地と見なされ、今でも巡礼が絶えないという。(本林2006: 32-34)

#### 【文献】

- 山本英治, 「古代社会の近代化: 貧しいが豊かなヒマラヤの王国ブータン: 一九九三年度始業講演: 現代文化学部」, 『東京女子大学紀要論集』44 (1), 111-122, 1993年9月20日
- 本林靖久, 「ブータンの宗教と生活 (上)」, 『言語文化研究: 中部大学女子短期大学紀要』7, 109-127, 1996年3月1日
- 本林靖久, 「ブータンの宗教と生活 (下)」, 『言語文化研究: 中部大学女子短期大学紀要』8, 53-74, 1997年3月1日
- 山本けいこ, 『ブータン—雷龍王国への扉』, 明石書籍, 2001年1月20日
- ドージ ルイーザ, 「ブータンの現代社会: 伝統, 近代性そしてナショナルアイデンティティ (国民意識)」, 『京都産業大学論集. 人文科学系列』32, 122-132, 2004年3月
- 西川 潤, 「ブータンに見る「国民総幸福」—理論と実際」, 『アジア太平洋討究』(8), 17-28, 2005年10月
- ドルジ・ワンモ・ワンチュック, 中井真孝, 岡村正幸, 「公開講演会「ブータンの宗教文化と福祉」に関連して (抄録)」, 『佛教大学アジア宗教文化情報研究所研究紀要』1, A39-A41, 2005年3月25日
- 早川克巳, 「時の話題 国民総幸福実現への道—ブータン流成長神話克服は可能か」, 『消費と生活』(264), 12-16, 2005年7月
- 平山修一, 『現代ブータンを知るための60章』, 明石書店, 2005年4月
- 本林泰久, 『ブータンと幸福論—宗教文化と儀礼』, 法蔵館, 2006年
- 宮本万里, 「現代ブータンにおけるネイション形成: 文化・環境政策からみた自画像のポリティクス」, 『人文學報』94, 77-100, 2007年2月
- 上田晶子, 『ブータンにみる開発の概念—若者たちにとっての近代化と伝統文化』, 明石書店, 2006年
- 山村高淑, 「ブータンに学ぶ観光開発の哲学—GNHとツーリズムの関係性についての一考察」, 『観光文化』32 (2), 18-21, 2008年3月
- 本林靖久, 「ブータンの近代化と伝統文化 (第九部会, <特集>第六十六回学術大会紀要)」, 『宗教研究』81 (4), 1194-1195, 2008年3月30日
- 永田智章, 「ブータン王国における経済開発と国民総幸福量: GNH 追求政策をめぐる経済学的考察」, 『経済研究論集』30 (3・4), 191-208, 2008年2月
- 宮下史明, 「GNH (国民総幸福量) の概念とブータン王国の将来: GNPからGNHへ」, 『早稲田商學』420-421, 39-74, 2009年9月15日
- 千田 稔, 「ブータンのGNH (国民総幸福) の考察—仏教と権力の観点より」, 『仏教経済研究』(38), 139-161, 2009年5月
- 大橋照枝, 『幸福立国ブータン—小さな国際国家の大きな挑戦』, 白水社, 2010年7月25日